



前進座特別公演

優しさにめぐり逢う

三沢伊兵衛 早瀬栄之丞

妻たよ 浜名実貴

雨あがる

山本周五郎 原作
津上忠 脚色
市川正 補綴・演出

～ 暮らしの中に演劇を ～

宮崎市民劇場

第200回例会

2026年 2月10日(火) 開演18:30 (開場18:00)

会場: 宮崎県立芸術劇場(演劇ホール) メディキット県民文化センター

会員制 入会金・月会費(大人2500円・学生1500円)

問い合わせ 〒880-0805 宮崎市橘通東3-3-8 カブトビル3F 0985-62-0075



前進座特別公演

山本周五郎 原作
津上 忠 脚色
市川 正 補綴・演出

雨あがる

雨は好きさ

雨は金持ちだろうが貧乏人だろうが
分け隔てなく降るからね

山本周五郎が一九五一年に発表した短編小説を、
前進座では一九七〇年に津上忠 脚色・演出で舞台化。
貧しいながらも優しさと気品を失わない夫婦
(早瀬栄之丞・浜名実貴)の、人生への向き合い方、
揺れる心の機微が爽やかな感動を呼ぶことでしょう。
今回は、補綴・演出に市川正氏を迎え、新しい『雨
あがる』が誕生しました。お楽しみください！

【あらすじ】

仕事を探して旅をする浪人・伊兵衛、たよ夫婦。辿り着いたのは、続く大雨のせいで客が旅立てなくなった川宿だった。巡礼の老人と孫、旅芸人、酌婦、生臭坊主、そして密かに忍び込んだ脱獄の罪人。川宿に足止めされた彼らは苛立ちを募らせていき、些細なことをきっかけに鬱憤をぶつけ合ってしまう。伊兵衛はそんな彼らに少しでも明るい気持ちを取り戻してもらおうと、絶対にしない。と妻に誓っていたあることに手を伸ばしてしまうのであった。やたら腕は立つのに優しすぎるせいで詰めの甘い男・伊兵衛と、それを気品高く見守る妻・たよ。

川宿に降り続く雨は、そして伊兵衛夫婦に降る雨は、いつか晴れるのだろうか。



早瀬栄之丞



黒河内雅子



中嶋宏太郎



浜名実貴



北澤知奈美



横澤寛美



松涛喜八郎



柳生啓介



石嶋隆生



中野里咲



清水麻美



山本春美



松川悠子



玉浦有之祐



新村宗二郎



上滝啓太郎

美術＝石井強司 照明＝森田 博 音楽＝小堀ひとみ 音響効果＝川名あき 殺陣＝中川邦史朗 振付＝芳澤香榎 舞台監督＝小野文隆

デザイン＝市川きよあき事務所 題字＝角田美和 宣伝写真＝三井 実 ヘアメイク＝武井優子

九演連のみな様へ

「前進座に限って僕の原作で舞台化したものがあつたら何を取り上げてよい」と言っていた山本周五郎さんの作品です。『さぶ』『赤ひげ』『柳橋物語』など例会として取り上げていただいた作品は数多くありますが、『雨あがる』は初となります。周五郎作品としては異色の剣豪ものですが、根底を流れる貧しく弱い人々とともに希望を見出そうとする志は変わりません。

私たちは、コロナや戦争に心を痛め、どこか重苦しい空気の中で未来への不安を感じながら、みんな、ここで負けるか、この苦しさを乗り越えよう、と必死で頑張っています。最近では寛容でない社会になったとよく言われます。けれども、誰もが、できれば優しくありたいと願っています。みんなの優しさを肯定する物語になっております。そして、いつか必ず雨はあがる、苦しみはいずれ遠ざかる、そのことを信じて前を向いて歩き出そう、というエールは、まさに、今の市民劇場。そして、我々創造団体に向けられているのかもしれない。

感想文より

● 昨今のひどい世の中でも「人間の優しさ」に焦点をあて、「世界が平和で人々が幸せに暮らせる」未来が開けるヒントを示してくれました。

● 時代小説の作品というよりも、何か現在の世相にも通じるところがあると思いました。やさしい心になりたいと思いつつも、なかなかそうきないのはなぜだろうかと考えました。

● 雨が物語のメインテーマと思われます。演出が大変面白く、雨のイメージをかき立てられました。人の思いやりの大事さを再認識し、久しぶりに心洗われるような舞台でした。